



写真/10月に出産予定の黒土和穂さん(赤池)と、お兄ちゃんになる旭くん(5歳)



考えてみてください
未来のこと
地球のこと
子どもたちのこと

胸を張って次代へとつなぎたい。 「青い地球」というバトンを...



普 段 何気なくつけている電気を消して、ロソクに灯をともしたとき

大切なものに気づけるかもしれません。それは、こぼれるほどの星空であったり、いまを生きている自分の命であったり、大切な人の存在であったり、限りあるエネルギーのことであったり...。そんなゆっくりとした時間なら、それらがあたり前にあるのではなく、欠かせないものであることも再確認できるような気がします。静かなキマンドルが、忘れていた何かと向き合う時間を取り戻してくれる。時には世界地球未来へと想いは膨らむかもしれませんが、いい未来は、子どもたちを想うことから

はじまります。未知の未来に向かって、子どもたちは歩いていく。その小さな足はしっかりと緑の大地を踏みしめることができるでしょうか。今の大人たちが幼いころ、豊かな自然とふれあい、体験し、多くのことを学んで人間性を培ってきたように、次

代の子もたちは、ふるさとの自然に抱かれ、育てられていくのでしょうか。

地球の温暖化は人為的なもの。完全に抜け出すには、洞爺湖サミットで日本が表明したように、2050年までに現状から60%の温室効果ガスを削減しなければなりません。これは人間が便利さを求めた結果、課せられた宿題です。わたしたちはわたしたちが壊してしまったものを回復するために、行動しなければなりません。

意識することから始まる 温暖化のピークアウト

「ストップ地球温暖化！ 共生できる持続可能な社会を」そう、多くの人が望んではいらないと思います。でもそれは、おそらく気持ちの上でのことであって、多くの人が行動に移していないのが現状です。
1950年に25億人だった地球の人口も

2050年には90億人に到達すると予想されています。地球はこれからどうすれば、増加する人口と温室効果ガスを支えていけるでしょうか。地球が置かれた現状を知れば知るほど、がく然とします。「今の社会を変えるなんて、できるわけがない」と。

しかし、人間が豊かさを夢見て、文明や科学や便利さを求めた結果が、今の社会であるとしたら、人間は思い描き、失敗を重ね、それを乗り越えて、一つひとつの夢をかなえてきたといえます。いつの時代も人々の想像と創造が未来をつくらせてきた。だから、子どもたちに暮らして欲しい環境への夢や願いをわたしたちがもつと描けたなら、きつと素晴らしい地球のバトンを次代の子もたちに渡せるのではないのでしょうか。そのため、まず意識を常に「温暖化防止」に向けておくこと。そして何ができるのかを問い続けることが、わたしたちの責務です。

やがて、その意識は行動へとつながるはず。少しづつかもしれないけれど、きつと変えられるはず。タイムリミットはもう目の前。今の地球はそんな時期にさしかかっています。

We love the EARTH

